研究ノート

日本古代民衆史研究と菅原道真「寒早十首」

宮瀧交二

はじめに

奈良・平安時代を中心とした日本古代の民衆像について、残念ながら私たちは未だにその具体的なイメージを結ぶことが出来ていない。そのような中、国内の高等学校で最も数多く採用されている歴史教科書に掲載され続けるなどして、現時点で日本古代の民衆像の形成に最も寄与していると思われるのが山上憶良の「貧窮問答歌」ではないだろうか。しかしながら、この「貧窮問答歌」に関しては、既に別稿でも紹介したように、近年の多くの歴史学・国文学研究者による詳細な研究の結果、入唐している憶良が中国初唐期の詩人・王梵志の詩「貧窮実可憐」等の影響を受けているという指摘をはじめとして、近年ではこの歌から日本古代の民衆像を直裁的に看取することは困難であるという見解が定着しつつあるというのが研究の現状である。[1] そのような中、私は小稿で取り上げる菅原道真の「寒早十首」こそ、以下で述べるとおり「貧窮問答歌」よりもはるかに日本古代の民衆像を具体的に垣間見ることが出来る優れた文学作品であり歴史史料であると認識するものである。

尤も、「寒早十首」への注視は今に始まるものではない。例えば、今から約四半世紀前、滝川政次郎は、憶良の「貧窮問答歌」が「ひろく人々に知られている」のに対して、「これと同工異曲の菅原道真の「寒早十首」の詩は、殆ど知られていない」と述べているが、[2] 今日でもその状況は当時と全く変わらないと述べても過言ではないであろう。

それではなぜ、当該作品が日本古代の民衆史研究へ汎用されないような状況が続いているのだろうか。この点に関しては、二つの理由があるように思われる。その一つは、「寒早十首」が漢詩という文学作品であるがゆえに、そこに描出された歴史的事実と創作部分との見極めがつき難いとい

う点に起因していると考えられる。この点に関しては、日本古代史研究者がその内容を同時代の他の史料等から丹念に検証し、一つ一つ検討を加えていくことによって、徐々に克服されていくものと思われる。そして、もう一つの障害となっているのが、漢詩ゆえの難解さではないだろうか。道真の漢詩といえば、従来、国文学研究者や中国古典文学研究者による研究が蓄積されてきたところであるが、今後、日本古代史研究者は、これまでに蓄積されてきたこのような研究成果に学びながら、独自の視点からも「寒早十首」を検討していくことが急務ではないかと思われる。小稿では、そのような作業の出発点として、先ず次章において、これまでの諸家による読み下し及び現代語訳に関する研究成果を集成し、今後の便に供するものである。

一、菅原道真「寒早十首」について

既に広く知られているように「寒早十首」は、菅原道真［承和十二（八四五）～延喜三（九〇三）］が、その晩年にあたる昌泰三（九〇〇）年に醍醐天皇に奏上した漢詩文集である『菅家文草』の中に収められた五言律詩である。「寒早十首」という表題に続いて「同用人身貧頻四字」という割注があるように、一首八行のうち偶数行の最終字である「人」、「身」、「貧」、「頻」の四字が韻を踏んでいる。本詩は、以下に掲げるその内容からも明らかなように、道真の讃岐国司（守）在任中［仁和二（八八六）年～寛平二（八九〇）年］の作品であり、近年の見解では、任期初年度である仁和二年の冬に作られたとみられている[3]。道真が四十二～三歳頃の作品である。

以下、日本古典文学大系本『菅家文草[4]』に従って、この「寒早十首」の全文を掲出してみたい。なお、本文の表記に関しては旧字を新字に改めている。また、それぞれの読み下しと現代語訳に関しては、日本古典文学大系本の校注者である川口久雄の見解（〈川〉として掲出）に加え、数種に関しては近年まとめられた藤原克己氏の見解[5]を併記し（〈藤〉として掲出）、比較検討の便に供した。なお、［　］内は筆者が補ったものである。

寒早十首　同用人身貧頻四字

（第一首）

何人寒気早　〈川〉何（いず）れの人にか　寒気（かんき）早き
冬になって、どんな人に、ことに早く寒さがきびしく感ぜられる

のであろうか

〈藤〉何（いず）れの人にか寒気は早き
いかなる人に寒気はいち早く訪れるか

寒早走還人

〈川〉寒は早し　走り還（かえ）る人
他国に浮浪逃走したが、その逃亡さきから本貫（本籍）に放還されてきた人［には、早く寒さがきびしく感ぜられる］

〈藤〉寒は早し　走還（そうかん）の人に
寒気はいち早く訪れる、他郷から帰ってきた走還の者に

案戸無新口

〈川〉戸（へ）を案じても　新口（しんこう）無し
戸籍にてらしあわせても、そういう新しく走せ還った人間の名は見あたらない

〈藤〉戸（こ）を案ずるに　新口（しんこう）無し
この者を本籍に再編入するために戸籍を調べても、戸籍には近年の戸口の異動がまったく記載されておらず、役に立たなくなっているので

尋名占旧身

〈川〉名を尋（たず）ねては　旧身（きゅうしん）を占（うらな）ふ
姓名を糾問して、その出自や故郷を推量する

〈藤〉名を尋ねて旧（もと）の身を占（かんが）う
名前を尋ねて元の出身地を推測するほかない

地毛郷土瘠

〈川〉地毛（ちぼう）　郷土瘠（や）せたり
郷里の土地は瘠せて、いくら労役しても実りが少なく

〈藤〉地毛（ちもう）　郷土瘠（や）せたり
ここの土地は瘠せていて作物（地毛）に乏しく

天骨去来貧

〈川〉天骨（てんこつ）　去来（きょらい）貧し
あくせく往来するままに民の骨ぐみも貧弱になる

〈藤〉天骨（てんこつ）　去来（きょらい）貧し
人々は貧相な骨格で苦労を重ねている

不以慈悲繫　〈川〉慈悲を以（もち）て繫（つな）がざれば
国司が慈悲ある政治を行なって、
百姓の心をしっかりつなぎとめておかなければ
〈藤〉慈悲を以て繫（つな）がざれば
もし慈悲をもってつなぎとめることができなければ

浮逃定可頻　〈川〉浮逃（ふとう）定めて頻（しきり）ならむ
生活の苦しさ、税の重さ、書院・諸宮・諸司・諸家の手さきたちの強迫にたえかねて、浮逃逃散するものもきっとしきりに出てくるであろう
〈藤〉浮逃（ふとう）定（さだ）めて頻（しき）りなるべし
今後も他郷に浮浪逃亡する者は跡を絶つまい

（第二首）

何人寒気早　〈川〉何（いず）れの人にか　寒気（かんき）早き

寒早浪来人　冬になって、どんな人に、ことに早く寒さがきびしく感ぜられるのであろうか
〈藤〉何（いず）れの人にか寒気は早き
いかなる人に、寒気はいち早く訪れるか
〈川〉寒は早し　浪（うか）れ来（きた）れる人
他国より部内に流入してくる流離浮浪の人人［には、早く寒さがきびしく感ぜられる］
〈藤〉寒は早し　浪（のが）れ来たる人に
寒気はいち早く訪れる、他郷から逃亡して来た者に

欲避逋租客　〈川〉避（さ）けまく欲（ほ）りして租（いだしもの）を逋（のが）るる客（たびびと）は
税の重い負担をのがれ避けようと思って他国より逃散してきて、土民の間に寄生する下層農民は
〈藤〉逋租（ほそ）を避（まぬが）れむと欲（ねが）いし客（たびびと）は

未納の税（逋租）を免れようとした彼は

還為招責身　〈川〉還（かへ）りて責（せ）めを招く身となる

（土断法によって）浪人ながらこの部内で入籍して税を責め取られる身となる

〈藤〉還（かえ）りて責めを招く身と為（なれり

かえってこの地で責めをこうむる身となった

鹿裘三尺弊　〈川〉鹿の裘（かはごろも）　三尺の弊（やぶれ

三尺の鹿の革のジャムパーもぼろぼろにやぶれている

〈藤〉鹿裘（ろくきゅう）　三尺弊（やぶ）れ

鹿の裘（かわごろも）はぼろぼろで

蝸舎一間貧　〈川〉蝸（かたつぶり）の舎（いへ）　一間（いっけん）の貧しさ

一間のあばら小屋

〈藤〉蝸舎（かしゃ）　一間（いっけん）貧し

蝸（かたつむり）の舎（いえ）のような一間の小屋に住む貧しさ

負子兼提婦　〈川〉子を負ひ　兼ねて婦（つま）を提（ひきさ）ぐ

妻子同伴、家族づれの浮浪人

〈藤〉子を負い　兼（ま）た婦（つま）を提（たずさ）え

子供を背負い、妻の手を引いて

行々乞与頻　〈川〉行（ゆ）く行（ゆ）く　乞与（きよ）頻（しき）りなり

寄生してきた浮浪人どもがうろうろと物乞いに出歩くのに対して在地の百姓たちがしきりに食を与えるのである

〈藤〉行く行く乞丐（きっかい）頻りなり

行く行く乞丐（ものごい）すること頻りである

（第三首）

何人寒気早　〈川〉何（いず）れの人にか　寒気（かんき）早き

冬になって、どんな人に、ことに早く寒さがきびしく感ぜられる

のであろうか

寒早老鰥人　〈川〉寒は早し　老（お）いたる鰥（やもめ）の人
妻を失ったひとりみの男［には、早く寒さがきびしく感ぜられる］

転枕双開眼　〈川〉枕（まくら）を転（まろば）して双（なら）び開（ひら）くる眼（まなこ）
枕をうごかして寝つこうとして輾転反側して、両眼をぱっちり開けている

低簷独臥身　〈川〉簷（のき）に低（たれ）て　独（ひと）り臥（ふ）する身
軒を高くすることのできないみすぼらしい小屋に、独り寝ている男

病萌逾結悶　〈川〉病に萌（きざ）しては　逾（いよいよ）悶（もだえ）を結ぶ
老いた体に病気もきざしていよいよ煩悶がかさなる

飢迫誰愁貧　〈川〉飢（う）ゑ迫（せま）りても　誰（たれ）か貧しきを愁（うれ）ふる
飢えが迫っても、誰も米塩のともしいことを心配してくれるものもいない

擁抱偏孤子　〈川〉擁抱（ようほう）す　偏（ひとへ）に孤（みなしご）なる子
母親を失った幼児を抱きかかえて

通宵落涙頻　〈川〉通宵（よもすがら）　落涙（らくるい）頻（しきり）なり

（第四首）

何人寒気早　〈川〉何（いず）れの人にか　寒気（かんき）早き
冬になって、どんな人に、ことに早く寒さがきびしく感ぜられるのであろうか

寒早夙孤人　〈川〉寒は早し　夙（つと）に孤（みなしご）なる人
早く父母を失った孤独の人［には、早く寒さがきびしく感ぜられる］

父母空聞耳　〈川〉父母（ちちはは）は空（むな）しく耳（みみ）にのみ聞く

父母はもう眼でみることができないで、空しくその話をきくばかり

調庸未免身　〈川〉調庸（てうよう）は身を免（まぬか）れず
いくら孤児であっても調庸の義務は免除せられない

葛衣冬服薄　〈川〉葛衣（かつい）冬の服（きもの）薄し
冬も夏きる葛衣の薄いものをきている

蔬食日資貧　〈川〉蔬食（そしよく）日の資（たす）け貧し
毎日の生活を支える食べものも貧弱だ

毎被風霜苦　〈川〉風霜（ふうさう）の苦（くる）しびを被（かかふ）る毎（ごと）に

思親夜夢頻　〈川〉親を思ひて夜（よは）の夢頻（しきり）なり

（第五首）

何人寒気早　〈川〉何（いず）れの人にか　寒気（かんき）早き
冬になって、どんな人に、ことに早く寒さがきびしく感ぜられるのであろうか

寒早薬圃人　〈川〉寒は早し　薬圃（やくほ）の人
薬草園の園丁［には、早く寒さがきびしく感ぜられる］

弁種君臣性　〈川〉種（しゆ）を弁（べん）ず　君臣（くんしん）の性
薬草には色色様様の種類と格付けがある、それを弁別する

充傜賦役身　〈川〉傜（やう）に充（あ）つ　賦役（ぶやく）の身
賦役の義務のある身だから、薬圃に働くことを以て傜役に充当している

雖知時至採　〈川〉時至（いた）らば　採ることを知れども

不療病来貧　〈川〉病来たりて　貧しきことを療（いや）さず
いくら薬草を採取していても、病気になって貧しいこの境遇をなおすことはできない

史苑（第六七巻一号）

一草分銖缺　〈川〉一草（いっさう）　分銖（ぶんしゆ）をだに缺（か）かば
　わずか一本の薬草の、ほんの一分
　一厘でも不足していたとしても

難勝箠決頻　〈川〉箠決（ついくゑつ）の頻（しきり）なるに勝（た）へ難（がた）からむ
　鞭でうって傷つけられることが
　頻りで、たえがたいことであろう

（第六首）

何人寒気早　〈川〉何（いず）れの人にか　寒気（かんき）早き
　冬になって、どんな人に、ことに
　早く寒さがきびしく感ぜられる
　のであろうか

〈藤〉何（いず）れの人にか寒気は早き
　いかなる人に、寒気はいち早く訪
　れるか

寒早駅亭人　〈川〉寒は早し　駅亭（えきてい）の人
　輸送労働者「には、早く寒さがき
　びしく感ぜられる」

〈藤〉寒は早し　駅亭の人に
　寒気はいち早く訪れる、駅亭の者
　に

数日忘飡口　〈川〉数日　飡（そん）を忘（わす）るる口
　駅亭に働く駅子・伝子たちは、ど
　うかすると数日間もしるかけめ
　しをさえ口にかきこむことも忘
　れるほどにおいつかわされる

〈藤〉数日　飡（くら）うことを忘るる口
　彼は数日ろくに食事もできない
　ほど酷使されながら

終年送客身　〈川〉年を終ふるまでに　客（たびびと）を
　送る身
　年がら年中旅客を輸送する身で
　ある

〈藤〉終年　客を送る身
　生涯、旅客を運ぶ身なのだ

衣単風発病　〈川〉衣は単（ひとへ）にして　風は病を発
　（おこ）す
　冬になってもきものはうすい単
　衣（ひとえごろも）なので、風邪から
　病気をひきおこしやすい

〈藤〉衣は単（ひとえ）にして風に病（やまい）

を発すれども
着ているものは裏地のないひとえで、寒風にあたって病気になりやすい

業廃暗添貧

〈川〉業（なりはひ）は廃（はい）すれば暗（むな）しく貧しさを添（そ）ふ。
この仕事をやめればすぐ貧乏がおっかけてくる。

〈藤〉業（なりわい）を廃すれば暗（むな）しく貧を添う
けれども仕事をやめればいよいよ貧しくなるばかり

馬痩行程渋

〈川〉馬さえ痩（や）せて　行程（かうてい）渋（しぶ）りぬれば
駅の伝馬（てんめ）が痩せて、郵逓の速度がにぶってくれば

〈藤〉馬痩（や）せて行程渋（しぶ）れば
彼の家で飼育している馬も痩せているので、なかなか行程が進まないと

鞭笞自受頻

〈川〉鞭笞（むちしもと）自（おのづか）らに受くること頻（しきり）なり
駅亭の働く人たちは自然駅長からきびしいいましめの鞭をうけることが屢屢だ

〈藤〉鞭笞（べんち）自（みずから）らに受くること頻りなり
馬ばかりか彼自身までが、旅客の官人から鞭（むち）打たれること頻りである。

（第七首）

何人寒気早

〈川〉何（いず）れの人にか　寒気（かんき）早き
冬になって、どんな人に、ことに早く寒さがきびしく感ぜられるのであろうか

寒早賃船人

〈川〉寒は早し　賃船（ちむせん）の人
船にやとわれて働く水手（かこ）・舟子・檝取（かんどり）［には、早く寒さがきびしく感ぜられる］

不計農商業

〈川〉農（なりはひ）商（あきなひ）の業（わざ）を計らず

彼らは自身で独立して農業や商業を自ら営まない

長為儆直身　〈川〉長（とこしなへ）に直（あたひ）に儆（やと）はるる身となる
いつまでたっても賃銀に雇傭せられる身の上である

立錐無地勢　〈川〉錐（きり）を立てむに地勢なし
彼は錐を立てるほどの広さの土地ももっていない。水上生活者だからであろう

行棹在天貧　〈川〉棹（さを）を行（や）ること　天貧（てんひん）なるに在り
棹をあやつり、船をはしらせることも、天性貧しくともしいさがに生まれついているためだ

不屑風波険　〈川〉風波（ふうは）の険（けは）しきは屑（もののかず）にせず
海上風波があれるというようなことは、眼中にないが

唯要受雇頻　〈川〉ただ要（もと）む　雇（やと）ひを受くること頻（しきり）ならむことを
彼らの関心事は船主に賃やといせられることがしきりであるかどうかということである

（第八首）

何人寒気早　〈川〉何（いず）れの人にか　寒気（かんき）早き
冬になって、どんな人に、ことに早く寒さがきびしく感ぜられるのであろうか

寒早釣魚人　〈川〉寒は早し　魚（いを）を釣る人

陸地無生産　〈川〉陸地に　産（なりはひ）を生むすべなく

孤舟独老身　〈川〉孤舟（こしう）に　独（ひと）り身を老いしまくのみ

罌糸常恐絶　〈川〉糸を罌（たは）めて　常に絶えむかと恐る
釣糸を海中に投げたわめて、糸がきれやしないかと恐れる

投餌不支貧　〈川〉餌（ゑ）を投ぐれども　貧しきを支（さ）へず
餌を投げ与えて魚をいくら釣ってかせいでも、貧しいくらしを支

えかねる

売欲充租税　〈川〉売りて租税（そぜい）に充（あ）てむことを欲（ほ）りす
せっせと釣った魚を売って、租税に充当しようと思って

風天用意頻　〈川〉風天（ふうてん）　意を用ゐること頻（しきり）なり
風向きはどうか、天気具合はどうかと、魚釣りの漁夫たちはしきりに気にかけている

（第九首）

何人寒気早　〈川〉何（いず）れの人にか　寒気（かんき）早き
冬になって、どんな人に、ことに早く寒さがきびしく感ぜられるのであろうか

〈藤〉何（いず）れの人にか寒気は早き
いかなる人に、寒気はいち早く訪れるか

寒早売塩人　〈川〉寒は早し　塩（しほ）を売る人
塩商人［には、早く寒さがきびしく感ぜられる］

〈藤〉寒は早し　塩を売る人に
寒気はいち早く訪れる、塩を売る者に

煮海雖随手　〈川〉海を煮ること手に随（したが）ふとも
海潮を汲んで塩を焼くことは手当たり次第に出来るしごとだとはいえ

〈藤〉海を煮（に）ることは手に随（したが）うと雖（いえど）も
海水を煮ることは手当たりしだいだとはいえ

衝烟不顧身　〈川〉烟（けぶり）を衝（つ）きて身を顧（かへり）みず
藻塩やく煙にむせることもかまわず、煙をついてたち働く

〈藤〉烟（けぶり）を衝（つ）きて身を顧みず
藻塩を焼く烟に真っ黒になるのもかまわず働いている様子はやはり重労働である

旱天平価賤　〈川〉旱天（かんてん）は価（あたひ）の賤（やす）きを平かにす

日照りがつづいて生産があがるので、塩価が自然の公平な法則で廉く低落する

〈藤〉旱天（かんてん）に平価（へいか）は賤（やす）けれども
日照りが続けばそれだけ塩の生産量が上がって標準価格は低落するけれども

風土未商貧

〈川〉風土は商（あきなひびと）を貧しからしめず
この沿岸一帯製塩に適する風土は、塩商人を貧しくしない

〈藤〉風土は未（いま）だ商（あきない）に貧しからず
瀬戸内海沿岸のこの土地の気候風土は製塩に適しており、本来商いが貧しくなるはずはないのである

欲訴豪民擢

〈川〉訴（うるた）へまく欲（ほり）す　豪民（がうみん）の擢（ほほあらあら）しきこと
土豪が勝手に威勢をほしいままにして、塩の売買輸出にあたって商利を独占することを、役人に訴えたいと思う

〈藤〉豪民（ごうみん）の擢（ひとり）じめを訴えむと欲して
にもかかわらず彼らが貧しいのは、豪民が利益を独占するからで

津頭謁吏頻

〈川〉津頭（しんたう）に吏に謁（えつ）すること頻（しきり）なり
塩を売る人が、輸出港のはとばのあたりで、税関吏などに会って、実情を訴えることしきりである

〈藤〉津頭（しんとう）に吏（り）に謁（えつ）すること頻りなり
その不正を訴えようと、船着場あたりで官吏に謁すること頻りである

（第十首）

何人寒気早

〈川〉何（いず）れの人にか　寒気（かんき）早き
冬になって、どんな人に、ことに早く寒さがきびしく感ぜられる

のであろうか

寒早採樵人　〈川〉寒は早し　採樵（さいせう）の人
きこり［には、早く寒さがきびしく感ぜられる］

未得閑居計　〈川〉未（いま）だ閑居（かんきょ）の計（はかりごと）を得ず
いつになったら働かないでひまを楽しむことができるというめあてもない

常為重擔身　〈川〉常に重く擔（にな）ふ身たり
毎日せっせと木をきり出して重い木を肩にかついで運ぶ身の上

雲巖行処険　〈川〉雲巖（うんがむ）　行く処（ところ）険（けは）しく
木こりがいくところは、嶮しい山の岨路（そばみち）で、岩群に雲がかかっている

甕牖入時貧　〈川〉甕牖（をういう）　入る時貧なり
家に帰ってくると、木こりの家の入り口はまことに粗末だ

賤売家難給　〈川〉賤（やす）く売れば　家（いへ）給（きふ）し難（がた）し
とってきた杣木（そまき）を廉（やす）いねだんではたかれたのでは、家計のたしにはならない

妻孥餓病頻　〈川〉妻孥（せいど）　餓（う）ゑと病ひと頻（しきり）なり
妻も子も餓えてしきりに病気になる

二、「寒早十首」の中の民衆像

以上のように「寒早十首」には、様々な立場に置かれ、冬の寒さが身にしみるような九世紀末頃の貧しい民衆の姿が具体的に描かれている。

第一首では、一度他国に逃亡した後、逃亡先で捕らえられて本貫地である讃岐国に送還されてきた人々の姿が描かれている。「走還」の語は、養老考課令増益条に見え、既に奈良時代から律令国家がこのような事態を想定していたことがうかがわれる。藤原克己氏によれば、雅語ではなく律令用語を詩作に用いるのは、白居易の作品に学んだものではないかということである。[6]

続く第二首には他国から浮浪して来た人々の姿が描かれている。当該期、讃岐国内には第一首のように他国から

送還される人々はもとより、他国から浮浪してくる人々も跡を絶たなかったのであろう。遠藤光正氏によれば、「欲避逋租客」は『後漢書』光武紀、「鹿裘三尺弊」は『列子』天瑞篇、そして「蝸舎一間貧」は何遜や許渾といった詩人[7]たちの作品にそれぞれ典拠が認められるとのことである。

第三首には、妻を亡くした男性すなわち「鰥」の姿が描かれている。養老戸令鰥寡条には「鰥」に関する規定があるが、同条の義解は「鰥」について「六十一以上而無妻為鰥也」と述べている。W・W・ファリスが算出したように八世紀前半の男性の平均余命が三十二・五歳であったとするならば[8]、六十一歳以上という年齢は、当該期にあってもおそらくはかなりの長寿ということになるであろう。従って「擁抱偏孤子」という表現からは小さな子供がいたことになるが、この年齢の男性に小さな子供がいたというこの記述が事実か否かに関しては慎重に判断を下さなければならないであろう。遠藤氏によれば、「転枕」は『白氏文集』巻五十八所収の「睡覚」に典拠が認められるとのことである[9]。

第四首では、早くに親を失った孤児について記されている。遠藤氏によれば、「葛衣」は『史記』太史公自序や『韓非子』五蠹篇等、「蔬食」は『論語』郷党篇や『荀子』[10]正名篇等にそれぞれ典拠が認められるとのことである。

第五首は薬園に働く人物が主人公である。「薬圃人」に関して川口久雄は、延喜典薬寮式諸国進年料雑薬条に「讃岐国四十七種」とあることから讃岐国にも薬園が存在したであろう事を指摘し、「薬圃人」とは「薬草園の園丁」であると記している[11]。しかしながらこの川口の見解には、滝川政次郎からの批判があり、「薬圃人」は、養老医疾令薬園条等に見られる「薬園生」に該当するものと思われる[12]。

第六首では、駅戸の苦しみが述べられている。藤原氏は、駅戸等は駅馬の飼育等の仕事に加えて地方官人たちの不正な駅馬の使用も多く、その負担は少なくなかったと述べているが従うべきであろう[13]。従来、日本古代の交通制度については、七世紀代には道路計画が策定・実現され、十世紀末頃には全国各地の駅制は崩壊すると考えられている[14]。ここに描かれた讃岐国の駅戸の様子は、従来あまり史料に恵まれずその実態が判明していなかった終末期の駅制を検討するための第一級史料ではないかと思われる。

第七首には、瀬戸内海に面した讃岐国らしい船舶労働者の姿が描かれている。遠藤氏によれば、「立錐」は『史記』留侯世家や滑稽伝にそれぞれ典拠が認められるとのことである[15]。

また、第八首も前首に続いて海に暮らす漁師の苦しみを描いている。当該の班田農民以外の一般民衆の姿が記され

ているという点において重要な史料である。

そして最も讃岐国らしい内容を有するのが第九首である。今日に至るまで讃岐国ひいては香川県は製塩業が盛んな地として知られているが、「風土未商貧」という表現は、当該期から讃岐国が製塩の適地として認識されていたことを示すものとして興味深い。また、前掲の駅戸と同様、製塩業に従事していた人々もまた地方官人を含む「豪民」の搾取の下で厳しい生活を送っていたことが既に指摘されているが[16]、当首もまた当該期の製塩業の実態を私たちに教えてくれるという点において貴重な史料となっている。遠藤氏によれば、「擢」は「占有する」「利益を独占する」の義であり、『漢書』に使用例が認められるとのことである[17]。

最終首は、海から一転して丘陵部を生業の場とする人々について記されている。遠藤氏によれば、「甕牖」は『禮記』儒行篇や『荘子』譲王篇、『後漢書』龐参橋玄伝論等に、また「妻孥」は『後漢書』陳球伝にそれぞれ典拠が認められるとのことである[18]。遠藤氏によれば、菅原道真が「寒早十首」において引用している中国の古典籍は、三史(『史記』・『漢書』・『後漢書』)に集中していることが特徴的であり、菅原氏の家業が文章博士の家であるだけに、これらの文献を「自家薬籠中のものにして自由に駆使している」と指摘している[19]。

以上のように、おそらく班田農民を主題としている山上憶良の「貧窮問答歌」に比べて、多様な労働に従事する様々な民衆の姿が描かれているという点において、菅原道真の「寒早十首」は、当該期の民衆史研究にとって大変貴重な史料である。もちろん、遠藤光正氏が指摘するような漢籍の引用をはじめとして、「寒早十首」があくまでも文学作品である以上、ここに描かれている内容のすべてが、当該期の讃岐国の民衆生活の実態を描写しているとは限らない。それゆえに、今後、九世紀後半頃を生き抜いた人々の姿を解明するために、この「寒早十首」をより様々な角度から検討していくことが重要である。

おわりに

他の時代に比べると極めて数量的に限定された史料を基にして取り組まなければならない日本古代史研究は、いきおい木簡に代表されるような遺跡出土文字資料等の新出史料に期待するところが小さくない。しかしながら、「守株」の故事ではないが新たな史料の登場を待ちぼうけていても埒があかないことは言うまでもなく、むしろ既存の史料を再評価することが重要になることは改めて述べるまでもない。小稿で取り上げた菅原道真の「寒早十首」もまさにそ

の範疇に含まれる史料の一つであろう。

このような既存の史料の徹底した再検討から新たな知見を検出するという姿勢こそ、まさに野田嶺志先生の歴史学に他ならない。演習の時間をはじめとして、こうした研究姿勢を繰り返し御指導下さった野田先生の学恩に改めて感謝の意を表したい。

註

（1）拙稿「村落と民衆」上原真人・白石太一郎・吉川真司・吉村武彦編『列島の古代史　ひと・もの・こと　三　社会集団と政治組織』岩波書店、二〇〇五年。
（2）滝川政次郎「憶良の貧窮問答歌と菅公の寒早十首」『日本歴史』四〇四、吉川弘文館、一九八二年。
（3）藤原克己『菅原道真　詩人の運命』株式会社ウェッジ、二〇〇二年。
（4）川口久雄校注『日本古典文学大系七二　菅家文草　菅家後集』岩波書店、一九六六年。
（5）前掲註（3）書。
（6）前掲註（3）書。
（7）遠藤光正「讃州時代の菅原道真と『寒早十首』」『東洋研究』一一三、大東文化大学東洋研究所、一九九四年。
（8）Farris, William Wayne, 1995, *Population, Disease, and Land in Early Japan, 645-900*, Harvard University Press.
（9）前掲註（7）論文。
（10）前掲註（7）論文。
（11）前掲註（4）書。
（12）前掲註（2）論文。
（13）前掲註（3）書。
（14）中村太一『日本の古代道路を探す　律令国家のアウトバーン』平凡社新書、二〇〇〇年。
（15）前掲註（7）論文。
（16）廣山堯道・廣山謙介『古代日本の塩』株式会社雄山閣、二〇〇三年。
（17）前掲註（7）論文。
（18）前掲註（7）論文。
（19）前掲註（7）論文。

（大東文化大学文学部専任講師）